



発行所
 比叡山時報社
 比叡山日寺報社
 大阪府大阪市東淀川区4-22-2
 郵便番号 520-0116
 電話 077-578-0001
 振替 00970-2-9732
 宗教法人延暦寺事務所
 定価 1部110円 年1200円

延暦寺広報

叡山講福聚教会 会報

年度会費 (3000円) 中
 に会報 (比叡山時報)
 購読料を含む。

祝 800号

<見開き特集>

- ・比叡山時報
800号記念鼎談

慰霊法要後には、焼き討ちの犠牲となった全ての殉難者を慰霊する「平和の塔 元亀兵乱殉難者鎮魂塚」にて、水尾寂芳延暦寺執行を先頭に、織田茂和氏・明智憲三郎氏、また勝海舟の末裔である高山みな子氏が殉難者の御霊に手を合わせながら周囲を歩き、平和への祈りを捧げた。



徳を以て怨みに報せば怨み即ち尽く

本年は伝教大師の大遠忌であると共に、元亀の法難から満450年でもありました。今年も法難の当日9月12日に犠牲者慰霊の法要を営みました。特に本年は、攻めた側の織田家と明智家の末裔の方に参列頂き、鎮魂塚へも参拝し、その後、対談という形でお話を聞かせて頂きました。対談では、両家の経験された苦難を知り、またこの法要への参列を先祖が喜んでくれるという思い、そしてこれからの新しい関係について語って下さいました。参列頂いた末裔の方々、この対談の実現にご協力頂いた皆さまに感謝申し上げます。この慰霊の法要は宗祖大師のご遺戒にある、「怨みを以て怨みに報せば怨み止まず、徳を以て怨みに報せば怨み即ち尽く」のお言葉に思いを致す機会でもありました。

さらに、同じ9月、年は70年前の1951年、日本の敗戦後の独立を認めるかどうかを決めるサンフランシスコ講和会議が開催され、セイロン(今のスリランカ)の代表ジャヤワルダナ氏(後のスリランカの大統領)が、日本に対する寛容と愛情を説き、日本の独立を認め、自国セイロンは日本に対する賠償請求を放棄する演説をされました。そこに引用されたのが、仏陀の言葉「人はただ愛によつてのみ憎しみを越えられる。人は憎しみによつては憎しみを越えられない。」という『法句経』の一節でした。会場はしばらく静まり返った後に大喝采が続いたといえます。一部の国が日本の分割統治を主張していた中、結果として49カ国が講和条約に署名し、日本の国際社会への復帰の道が開かれたのでした。

宗祖の言葉は釈尊の言葉と全く同じことを教えています。そして『法句経』の言葉は、「これは永遠の真理である」と結ばれています。

また、本年はこの法要の前日11日、あのニューヨークの同時多発テロから20年という年でもありました。ニュースでは当時の映像が流れ、全く想像もできない悲惨な光景を目のあたりにした当時の衝撃が蘇りました。その後またされた憎悪や分断、報復の連鎖。20年という時間から、私たち人間は、何を学んだと云えるでしょうか。人間としての感情の高まりと理性のコントロール、様々な思いが私たちの心の中にあります。ほとけの心も地獄の心も修羅の心も。相手を理解すること、自分のこととして考える、人にも自分と同じほとけの心がある、そして自分にも鬼の心がある。人を許すことが自分を許すことではないのか。本年の比叡山から発信する言葉「自他同心」ということを思い返しました。

祝 比叡山時報 創刊第800回号

現代比叡山を象徴する僧との鼎談

「覚悟」を決め「当り前」に気付く

未だ収束の見通しがつかない新型コロナウイルス感染症や天災の脅威にさらされ、人々の不安は尽きない。本号では、歌舞伎俳優の市川猿之助氏や宗祖伝教大師の御廟にて比叡山中に最も清浄な地浄土院を訪れ、奇しくも同年代である北嶺千日回峰行僧南浩元大行満大阿闍梨、また侍真僧である渡部光臣師と共に、困難な時代に生きるヒントを模索し共話り合われた様子をお届けする。

十二年籠山中に辛かったこと

市川猿之助(以 猿之助)

侍真さまと阿闍梨さまに共通しているのが「十二年籠山行。無動寺の回峰地獄、浄土院は掃除地獄、横川の看経地獄と合わせ「比叡山三天地獄」と聞いておりますが、行を勧められる中でそれを苦痛や辛いこととはなかったのでしょうか。

渡部光臣侍真(以下侍真)

よく聞かれるのですが、行に入る前は私も身も人間です。「もしかすると5年か6年で嫌になってしまふのかな」と思ったりいたしましたが、行を重なるにつれ「あたりがたい」と思うことが多くなりました。好相行で辛かった



伝教大師御廟を参拝する市川猿之助氏(鼎談の詳細は10月3日、10日のKBS京都『比叡の光』で放映)

当り前のことに気付く

侍真

猿之助さまは本浄土院を訪れて、この場所にごく馴染みを持たれましたか。

猿之助

私の尊敬申し上げていますお方に哲学者の梅原猛先生がおられるのですが、その方は「その人の人間性というのは死に際やお墓を見ればわかる」と仰っておられます。イエス・キリストさまは死してなお立っていらつしやる。またお釈迦さまは安らかに横になって眠っておられました。伝教大師さまの御廟を訪れたことは「静寂でどこか孤高、高い峰に咲く一輪の花のような、優しさがありつつも厳しい」という印象を受けました。浄土院はお釈迦さまの涅槃に通じるような優しい空気。伝教大師さまのお人柄に触れることが出来ました。

阿闍梨

私は伝教大師さまのお言葉のなかで「道心」というお言葉を励みに修行に勤めておりますが、猿之助さまはお大師さまのお言葉で何か好きなお言葉はございますか。

猿之助

「我が為に仏を作るなれば、我が為に経を写すなれば、我が志を述べよ」とのお言葉が好きです。お釈迦のお道しになられた「自らを灯火とし、自らをよびて」とせよ。法を灯火とし、

歌舞伎俳優

四代目 市川猿之助氏



昭和50年(1975) 四代目市川段四郎の長男として誕生。平成24年6月、市川集治郎を改め四代目市川猿之助を襲名。第39回芸術選奨文部科学大臣新人賞受賞。歌舞伎はもとよりテレビなどで人気の歌舞伎俳優

ことはありましたが、その後侍真職についてからは日々淡々と行を勤めておりますので辛いとか辛いということはありません。

猿之助

わたしたちが傍から見ていて大変だと思つたのは、阿闍梨さまが千日回峰行で修せられた「堂入り」です。九日間の断食断水、寝てはいけないというもの。堂入りの中で一番辛い時はいつでしたか。

観南浩元大行満大阿闍梨(以下阿闍梨)

覚悟を決めて行に入ったので辛いことはありませんでした。比叡山中修行をさせて頂く機会を得た時に、観南覚照大阿闍梨、師僧である観南俊照大阿闍梨、上原行照大阿闍梨の下で12年間小僧生活を送らせて頂きました。行に触れさせて頂き、いろいろなことを学ばせてもらったのは、特に最初にお世話になった院の観南俊照阿闍梨のところでした。色々な感銘を受け師匠となつていただき、師匠のようになりたくて、うなづかれました。千日回峰行に入りたくてという思いが膨らみました。

侍真

百日回峰行に入行する際、初めて浄衣に袖を通した時にすごい喜びを感じ、それに恥じない行者にならなくてはならないと思えました。だから辛いというよりは、憧れと喜びで千日間が終わったという感じでした。

猿之助

実際に修行に入った時は想像通りなのか。それ以上なのかまたそれ以下であったのか。その感覚はいかがでしょうか。

阿闍梨

毎日続けなくてははいませんが、先代が修された凄行だったことが身をもって感じているうれしい気持ちで勝つており、堂入りの時も入堂できることがうれしかったです。

侍真

同じように日々お勤めをこなして頂く事に当たってちょっとした変化が刺激となります。普通の社会生活では刺激が多すぎて気付けなかつた事に気がつくことが出来るようになってきました。それを12年間の積み重ねることによって様々なことに「本当にありがたい」と思えるようになってきました。行に入る前にそんな「気づき」が生活していたことが本当にありがたいな、そんな事を気づかせてくれる12年間でした。

阿闍梨

私は現在も「十二年籠山行」を続けておりますので、病氣やケガをせずに修行を続けさせていたいくために感謝しております。

猿之助

我々の世界でも「病氣しないのも舞うのも」という言葉があります。「病氣かかると修行を休んでしまうのは芸が未熟だから」という意味ですが、病氣やケガがなく当り前に進んでいくことが、本当に大事なことです。

侍真

一見簡単なことが実は偉大

猿之助

御二方が仏道を歩まれるにあたって師僧のお言葉や姿勢等、行の支えとなっていることを教えてください。

侍真

私の師僧は法話をされる機会の多い方でしたから、「人前で話す内容に間違いがあつてはならない」と、既に知っている事でも「一度調べ直し、ありとあらゆる書物を読みかかしておりました。私も今後人前で話す機会が多くなつてくると思いますので、いつも話しているような内容でも間違いが無いように丹念に調べなければならぬ」と思っています。



北嶺千日回峰行大行満大阿闍梨 観南浩元師

猿之助

常につれづれと共に毎日、毎分、毎秒を過ごされたのですか。

阿闍梨

師匠が綺麗にアイロンの掛かった浄衣を身に着けておられましたのでそれを真似して、浄衣のアイロン掛けも喜んでやりました。

猿之助

まさに「初心を忘るべからず」。しかし、その初心を時経につれ、その喜びが新鮮でなくなり、時は不平不満を言ってしまう。喜びを維持する欲求などをお伺いしたいです。

阿闍梨

そこは「覚悟」でしょうね。12年間の籠山行ですべて病院に行けない訳です。覚悟さえ決まればまことに行をさせて頂けるということが喜びを覚えました。

行に挑んだきつかけとは

猿之助

御二方は、お寺の家業の出身ですか。

阿闍梨

はい、お寺です。しかし程度はしましたが、お坊さんにはなりたくありませんでした。行院に2か月ほどかかるといふ事で比叡山に来ることになりました。できれば百日回峰行を終えた時点を地元で帰りたいと思っていました。しかし師僧にお仕するにあたり、また行に触れさせて頂く機会を得て、どんどんと回峰行をさせて頂けたら嬉しいなという思いが募っていききました。

侍真

私の場合はお寺の出身ではありませんでした。



浄土院侍真僧 渡部光臣師

阿闍梨

私は師僧やそのまた師僧から、お会いするたびに「頑張れ」と声をかけて頂いております。「頑張れ」ではなく、「緊張してはダメ」「緊張しろ」です。回峰行中に油断してケガをしてしまつても、また病氣にかかってしまつても病院に行くことが出来ません。行が進むにつれ、師僧らは行中には常に「気」を張れという意味で「緊張しろ」と声をかけてくださったことに気付きました。

猿之助

歌舞伎の世界では、「伝統をた受け継ぐのは簡単だが、世の中には四つものがある」といふことを学ばなければならぬと教わりました。四つは、まず「変わるもの」。これはどれだけ頑張っても自然と時代が変われば変化するのは、決して「変わるもの」。「これは親子の情愛であったり、時代の流れでも変わらないもの」です。そして「変えなければいけないもの」。昔の身分制度であったりとか、長い伝統の中で付いてきた垢のようなものです。そして最後に「変えてはいけないもの」。これは本筋でこれを変えてしまつたら大変なことにもなるもの。この四つを基本を教わりました。御二方のお話を伺っておりますと、12年間で得たものは決して難解な「仏教道理」などではなく、非常に簡単なこと。「しっかり調べ直し」であったり、「緊張しろ」とか「頑張れ」とか。これは先程の歌舞伎の四つの基本と非常に似ています。一見簡単なことでもそれが実はとても偉大なことなのだと思われました。

侍真

悲しみに寄り添い祈り続ける

猿之助

遠藤周作先生は本の中で、キリストさまが磔

昭和49年(1974)福岡県出身。平成3年出家得度、同9年叡山学院研究科卒業。同13年百日回峰行を満行後、同17年より三年籠山行へ入行する。同20年延暦寺一山善住院住職を拝命後、同23年より十二年籠山行並びに千日回峰行へ入行し、同27年10月「堂入り」満行。同29年9月18日千日回峰行を満行。現存する記録上51人目の大行満大阿闍梨となる。現在延暦寺一山善住院住職。

ので、当時延暦寺で行われていました、2年間お坊さんの基礎的な勉強を学んでいく叡山学寮という制度を利用し比叡山に参りました。学寮での日々の中で、戦後すぐに侍真を勧められた堀澤相門日講大僧正の本を拝読する機会がありました。学寮のカリキュラムを終えれば、あちらこちらに行つてみたいと思つておりましたが、その本を拝読した時、出来るかどうかわからないうちからなら十二年籠山行をやつてみたいという思いができたのがきっかけです。その頃、先代の侍真さまの行の期間があと7年ほど残つておられて、そろそろ後継を作つてほしいというご要望も思いました。その時、当時の学寮の行監をされていた福重善高師が「渡部君、次の十二年籠山行でうた」みたいなことをおっしゃいました。ちょうど堀澤大僧正の本を読んでいたもので、思わず「ハイッ」と申し上げしまいました。そこから話が進んでいき今こうやって勤めさせて頂いております。

猿之助

私には覚悟がないのです。歌舞伎俳優の家に生まれてしまつたら歌舞伎をやらなければならぬ。そういう中で覚悟もなしに何となくやっていると思えます。御二方のお話を伺いますが、修行の内容を知らないが故に「できる」ともあろうと思いますが、私の立場からみると覚悟をして行に入られたということがすごく素晴らしい。其れな思ひというのか深く深い思ひを感じます。いつも行と歌舞伎が共通する部分で尊敬をさせて頂いておりますが、本日は全て重ならない部分で今まで以上に尊敬させて頂いております。御二方から「覚悟」といふことを伺えて勉強になりました。

昭和47年(1972)兵庫県生まれ。山形大学理学部地球科学科卒業。平成14年4月、叡山学寮第5期生として入山し、同21年4月、延暦寺一山本行院住職を拝命。同年、6月16日、「好相行」へと入行。7月10日の8月29日午後1時頃「好相」を感得。その後浄土院で17人目の侍真僧として十二年籠山行へと入行し、令和3年4月1日同行を卒業。

にされた最後の瞬間に「神よ何故私を見捨てた」と叫びます。しかし神は何も言わない。またその後キリスト教徒が迫害を受けましたが「それでも神は沈黙を守ったままだった」と悩まれ自問自答されています。私は今のこのコロナ禍の状況はそれに非常に近い状況を感じています。御二方は国家の安泰と疫病退散を祈り祈られておられますが、感染者は一向に減らない。このような状況なか、自分の存在をどのように捉えておられるのでしょうか。そして、一向に変わらない世の中でのどのように向き合っておられるのでしょうか。

侍真

難しいお話ですが、私に出来ることは皆さまが等しく幸せになれるように祈っております。社会にあってはどうしても仕方がないものが多いです。しかし、自分の周りの方を考えるためにも「自分がどうすればいいか」を考え、行動し感染を防いで欲しい。そのような想いを祈りを通して皆さまに広げていければと思っています。

阿闍梨

私はまだ十二年籠山行中ですので、「御山」から人々の願いを仏さまにお届けするのが役目だと思っております。皆さまの願いが成就するように毎日祈らせていただいております。

猿之助

信仰とは目に見えないものの対話ですから非常に難しいことですが、今の辛い時代だからこそ「絆」などの思いがはつきりしてくるのだと思います。御二方のお話から人々の辛みや悲しみ等をより感じられておられることがよくわかりました。これからもお体にお気を付けて、世のため人のため祈り続けられることをお願いいたします。